

シャン通り駅 ポニーをめぐる人種交流

山形洋一

この寂れた駅は運動場跡地で、かつてカーキ色の英国軍人とインド人従者が群れ、近くにはシャン族によるポロ用ポニーの市があった。

ヤンゴンの町をくるんで南北にのびる長円形の環状鉄道の南西の角に、「シャン通り」駅がある。悲しくもさびれた駅で、近くの小児病院から運び出された使用済みのガラス瓶、プラスチック容器などが野積みされ、ひっそりと仕分けを待っている。東のピー通り駅へも、北のアロン通り駅へも、それぞれ0.8キロメートル（半マイル）という近距離で、何のためかこんな駅を作ったか首をかしげたくなる。

植民地時代、この駅はジムカーナー（Gymkhana）と呼ばれていた。ギリシャ語で野外競技場を意味する Gymnasion（いわゆるジム）と、ペルシャ語で「場、野」を意味する Khana を合成した英領インド方言「ジムカーナー」は、スポーツクラブを意味する。ここではかつてクリケット、フットボール、ホッケー、そしてポロが楽しめた。カーキ色に身を包む英国軍人とその従者（インド人）が闊歩する、武人の駅が想像される。

それに対して、東隣の「ピー通り」駅に接した「ペゲー・クラブ」に集まるのは、もっぱら白い麻服に身をつつむ文官や商人だったろう。彼等は熱帯の過酷な環境ですり減らした神経を回復するために、酒とトランプと噂話を必要とした。

いっぽう北隣の「アロン通り」駅（旧称「ミッションロード」）はアメリカ洗礼派ミッションの拠点で、キリスト教に改宗したカレン人達が赤や黒のロンジーで群をなしていたと思われる。わずか半マイルの距離で人種や階層が交代し、それに合わせて別個の駅が設けられていたのである。

だが夜になるとジムカーナーは、ディナーだけでなく音楽演奏やダンスパーティー（週2日）が楽しめる社交場となった。当時西洋音楽を演奏できるグループは軍楽隊に限られていたからだろう。

「シャン通り」の駅名は、ミャンマー北東の高原に住むシャン族に由来するが、そこにも

軍事とのつながりがある。当時の軍人にとって花形スポーツはポロだった。それは単なる競技の域を越え、軍事調練を意味していた。



図：ポニー頭部

ジョージ・オーウェルの小説『ビルマの日々』に登場する若くて傲慢な軍人 Verall は、日々ポロの練習をしていた。閉鎖的でいびつな白人社会からひとり距離をおき、花婿探しにやってきた世間知らずな白人娘の据え膳をちゃっかりいただくと、波紋を残して去ってゆく。次の任地へ向かう汽車飛び乗るときには、ポニーの餌代すら踏み倒すという傍若無人ぶりだが、全体にグロテスクなこの小説の中で、奇妙に爽やかな印象を残している。明日の命が保証されない青年将校の刹那的な生き方に、私などは同情すらしてしまうのだが、それはともかく、

シャン高原では良質なポニーが生産され、チークに次ぐ輸出品目として、主としてインドに送られていたこともあった。シャン族のポニー交易者はシュエダゴン・パゴダの西に広がる兵営付近にも集まり、「シャン村」を形成した。そこを通過して南北にのびる道が「シャンロード」で、その道が鉄道と交差する地点に「シャンロード」駅が設けられたのである。

だが 1897 に出版された Bird 著の旅行案内書では、当時すでにシャン族によるポニー飼養は下火だったようだ。シャンロードはその後、Zaya Road と改称され、ついで「バホロード」(中央道路)に吸収合併されるが、駅名は「シャンロード」で変わらない。

(了)